

畿内の初期瓦生産と工人の動向

菱 田 哲 郎

【要約】 日本における瓦の生産の開始から地方寺院の成立までを、瓦生産の初期の段階と捉え、その時期にみられる生産の特質を、工人の動向、生産地の様相というふたつの側面から考察することが、本稿の目的である。まず、基礎的な作業として、瓦陶兼業窯出土の資料を材料に須惠器編年を再検討し、年代の枠組を組み立てた。それをもとに軒瓦の編年を行い、かつ、製作技術に対する検討から、初期の瓦工の系統の復原を試みた結果、回転成形技法によって特徴づけられる瓦生産の流派の展開が明らかになり、ほかに少なくとも二系統の流派が、七世紀第一四半期に存在することが推測できた。そして、第二四半期になると、瓦工の系統が分岐し、多様なあり方が生まれることがうかがえた。さらに、瓦窯の窯体や操業形態、供給関係に対して検討を行い、須惠器生産との関係を視野に入れることから、生産技術を保持する瓦工と在地的な須惠器工人が結びついて瓦の生産が組織されたこと、その組織が必要に応じて成立、消滅するという柔軟なものであったことが推測できた。このような生産形態は、七世紀を通して拡大していく瓦生産の展開において、生産の拡散を容易にしたひとつの条件であったと考えられる。

史林 六九卷三号 一九八六年五月

はじめに

六世紀末に始まる飛鳥寺の造営は、大陸から将来された高度な技術が結集されて行われた一大事業であった。このとき導入された新たな技術のなかには、社会のなかで定着し、律令制下の生産の基礎となったものも多い。そのひとつとして、屋瓦の生産を挙げることができる。

瓦の生産は、飛鳥寺創建以降、大陸風寺院の造営の普及とともに拡大し、七世紀後半には畿内以外の地方での生産も活

発になり、七世紀の末には宮殿にも使用されるようになる。すなわち、飛鳥時代^①を通して瓦の生産は拡大の傾向にあると言えるが、そのような展開を可能にした生産技術、生産体制が、いかに整えられたかということ明らかにすることが重要であろう。本稿は、地方寺院造営の本格化する七世紀中頃までの時期を瓦生産の定着期と捉え、この時期の生産、供給にみられる特質を明らかにすることを目的とする。

これまで、瓦生産の特質を議論するとき、瓦窯の立地や構造、生産瓦の供給関係を問題にすることが多かった^②。しかし、生産組織や生産構造に言及するためには、生産にあたった工人の動向をも検討しなければならぬ^③。とくに、飛鳥時代には、瓦生産への須恵器工人の関与が明らかにされているので、生産地における瓦工と須恵器工人の動向を、より細かくみていく必要がある^④。また、瓦工の系統の問題も、瓦生産の展開のなかでは重要な位置を占めている。しかし、現状では、瓦工の系統に関しては、瓦当文様の作風から類推することに留まっている^⑤。また、寺院造営と工人の系統の関係を問題にする際にも、瓦当文様を手がかりにする場合が多い^⑥。文様ばかりでなく、瓦の製作技術に対して検討を加えることにより、工人の系統の復原がより可能になると考えられる。

本稿では、生産にあたった工人の動向を重視する立場から、まず瓦の製作技術に反映される瓦工の系統の復原という作業を進め、そのうえで、瓦工の活動の場である瓦窯においてみとめられる様相について検討を加えるという方法をとる。その際、各瓦窯をとりまく窯業生産の展開にも注意し、とくに須恵器生産との関わりについて、みていくことにする。

ところで、いかなる時代についての研究においても、年代という共通の尺度の樹立が、基礎的な手続きとして重要である。本稿で扱う七世紀前半は、文献資料においても比較的確かな記事が豊かになる時代であり、歴史を考古学の方法によって解明するうえでも、確かな年代が要求される。従来、瓦の年代は、瓦当文様から与えられてきたが、後論するように、文様の変遷に年代を付与することは、恣意的な解釈の入る余地もあり、最も有効な方法とは言えない。また、年代の定點であるべき寺院についても、創建年代に諸説のある場合があり、安易に年代を決めることがためらわれることもある。そ

ここで、考察に先だち、時間的变化が鋭敏であり、瓦と共伴することの多い遺物である須恵器をとりあげ、その編年に絶対年代を付与し、年代の枠組を提示しておく。

① 飛鳥時代という時代名称は、美術史学、建築史学の用語法から、七世紀前半にあてる用い方がしばしば行われているが、本稿では、日本史学の通説に従い、推古天皇が飛鳥豊浦宮に即位した崇峻天皇五年（五九二年）から平城遷都（七一〇年）までを指す区分として用いることにする。

② 近年の調査成果をとり扱ったものとして、毛利光俊彦「近畿地方の瓦窯」『仏教芸術』一四八号、一九八三年）、森郁夫「古代の瓦窯」（同前）、田中琢「古代窯業の展開」『講座・日本技術の社会史』第四巻（窯業、一九八四年）などが挙げられる。

③ 瓦生産組織の研究は、正倉院文書をはじめとする文献資料を材料に進められてきたが、史料の性格から奈良時代以後の官営工房ないしそれに進じた工房の組織に限られる傾向があった。ゆえに、その成果を、

时期的に先行する飛鳥時代の工房にあてはめることは困難である。

④ 田中琢「古代窯業の展開」（前掲）にまとめられている。

⑤ 本稿では、生産に携わる者すべてを工人と定義する観点から、瓦工人、須恵器工人のように用い、その生産にとって不可欠の技術維持層に対しては、瓦工、陶工とするように使い分けを行う。

⑥ 石田茂作「古瓦より見た日鮮文化の交渉」『考古学評論』第三輯、仏教考古学論叢、一九四一年）、藤沢一夫「日鮮古代屋瓦の系譜」『世界美術全集』第二巻、一九六一年）

⑦ 瓦当文様から工人の動向を推定し、寺院造営者との関わりを論じたものに、山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集、一九七八年）がある。

一 須恵器編年の再検討

須恵器の編年研究は、戦後著しい発展をみせているが、年代決定の拠りどころとなる定点についても深い関心が払われてきた。古くは、福岡県岩戸山古墳や奈良県石舞台古墳という、被葬者の擬定可能な古墳出土資料がとりあげられたが、一九五〇年代後半には、飛鳥寺、川原寺の発掘調査において下層遺構が確認され、その出土資料が年代の定点として重視されることになった^②。また、瓦と須恵器を生産した窯（瓦陶兼業窯）における両者の共伴関係も、須恵器の絶対年代を知らううえで重要であるが、幡枝元稱荷窯をはじめとする七世紀前半の例も増加している。とくに、近年、四天王寺や豊浦寺など、文献に現われる初期寺院の瓦窯の発見があいつぎ、そこでの瓦と須恵器の共伴関係が注目されることになった。こ

のように、年代の定点としてより重要な資料が加えられてきており、須恵器をより確実な年代の尺度とすることが容易になつてきている。しかし、現状では、統一した年代観が定まっておらず、編年によっては、同一の形態を土器に半世紀ものずれが生ずることもある^④。そこで、まず須恵器編年の再検討からはじめ、年代の手がかりを持つ遺跡出土資料の検討を経て、絶対年代を考えていくことにしよう。

1 隼上り窯出土須恵器の編年

飛鳥時代の前半の須恵器は、蓋杯や高杯における手法の省略や形態の退化、法量の縮小といった退化現象が顕著であり、時期的な差を細かく検討することが可能である。このような型式変化を念頭に、窯での層位関係を留意することから、より細かな編年が可能になる。編年の材料には、年代の定点になりうる瓦陶兼業窯の資料が望ましいが、豊浦寺に瓦を供給した京都府宇治市の隼上り窯^{はやぶが}からは、やや型式差のある須恵器が三基の窯の窯体、灰原から出土しており、編年の検討に耐えうる内容を持っている。そこで、隼上り窯出土資料の編年を行い、それをもとに須恵器編年を再検討することしよう。記述に際して、古墳時代以来の、蓋受けのためのたちあがりを持つ杯身とその蓋のセットを蓋杯と呼び、新たに出現する、つまみが付き、内面に身受けのかえりを持つ蓋を杯A蓋^⑤、それに対応する、高台の付かない杯身を杯Aと表現する。

さて、『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』では、出土須恵器を四段階に区分する編年案が示されている。しかしながら、その第三段階と第四段階の差が明瞭でなく、資料数も少ないので、本稿では両段階を合わせてⅢ段階とする区分によって捉えることにする。また、報告書の第2段階は、第3段階と時間的な差が少ない可能性があるので、別の資料を用いてⅡ段階を設定する。ゆえに、本稿のⅡ段階と報告書の第2段階は一致しない。以下、隼上りⅠ段階からⅢ段階について、蓋杯、高杯の型式変化を中心にみていくことにしたい(図一)。

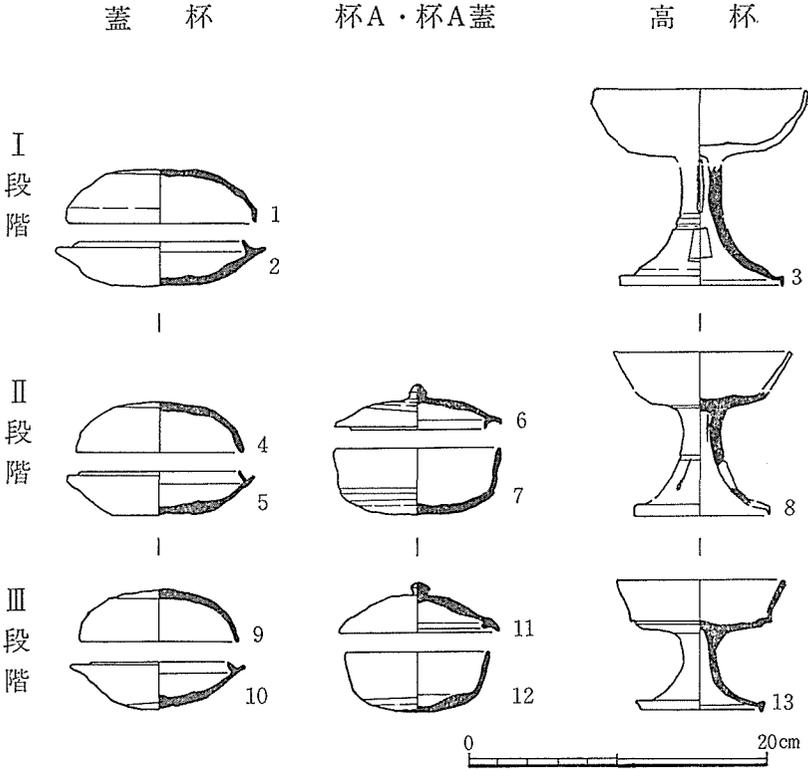


図1 隼上り窯出土須恵器の編年
 (1~3:1号窯灰原, 4~8:2号窯灰原, 9, 10, 13:2号窯最終床面, 11, 12:3号窯灰原, 縮尺5分の1)

隼上りI段階は、一括資料として提示できるものではなく、一号窯および二号窯の灰原に散在している資料によって設定できる。蓋杯は、身の口径（たちあがり径—以下同じ）が一二cm前後、蓋の口径が一三cm前後で、身の底部および蓋の天井部には、回転削りが施されるのが一般的である。この蓋杯には、二段透しをもつ長脚の高杯が伴うと考えられる。隼上りII段階は、二号窯灰原のなかでも、5 A、6 A、6 Z区の出土資料を標式とした。軒丸瓦の出土分布をみたとき、特定の型式がこの地区に集中する傾向が看取できるので、時間的にまとまりを持つものとして、共伴須恵器を扱おうと考えたからである。実際、蓋杯の口径をみると、身で一〇cm前後、蓋で一〇cm前後に集中する傾向があり、時間幅の少なさを暗

示している。口径の縮小と同時に、調整も粗雑化しており、身の底部および蓋の天井部でヘラ切り後の削り調整が省略されているものが主体を占める。また、少数ながら、乳頭状のままの付く杯A蓋が出現している^⑧。その天井部には回転削りが施されており、同時期の蓋杯と比べて調整が丁寧である。この杯A蓋に対応する杯Aは明確でない。杯Aが蓋杯の蓋と区別できない形態をとることも考えられるが、杯A蓋が三号窯灰原5A区で出土している小形の椀と組み合わせる可能性もあろう。この点でとくに、両者がともにヘラ切り後に削り調整されていることが注意される。5A、6A、6Z区出土の高杯には、脚の透しがヘラによる切り込みのみになったもの、あるいは全く失われたものがあるが、いずれもこの段階の高杯の様相を示していると考えられる。

二号窯最終床面の資料は、二号窯灰原の資料と比べて、蓋杯がさらに縮小しており、身で一〇cm、蓋で一〇cmを超えるものは、ほとんどない。また、身のたちあがりも、矮小化が一段と進んでいる。同一の窯においては、灰原内の遺物よりも、最終床面上の遺物の方が新しいことが自明であるので、前述の変化は時間差によると認められる。ゆえに、隼上りⅢ段階をこの資料によって設定する。ところで、二号窯最終床面の資料には杯A蓋が含まれていないが、Ⅱ段階の指標とした二号窯灰原では現れているので、最終床面の時期にも杯A蓋が存在すると考えられる^⑨。その杯A蓋の例としては、三号窯灰原左半出土の資料が挙げられよう。隼上りⅢ段階の高杯は、脚の透しがないうえに、二段に区分する沈線をも失っている。長脚の高杯の最末形態である。

以上の検討より得られた隼上りⅠ段階からⅢ段階を通観すると、蓋杯では、口径が身で約一二cmから一〇cm、九cmへと縮小している。調整も身の底部や蓋の天井部の外面に回転削りを施すものが、Ⅱ、Ⅲ段階ではほとんど稀であるという退化の傾向が看取できる。一方、杯A蓋は、Ⅱ段階に出現しているが、個体間の変異が大きく、器形として不安定である。そして、出現当初のものが、椀の蓋である可能性を持つことが注意された。高杯は、Ⅰ段階では長脚二段透しであるが、Ⅱ段階で透しの退化、消失がみられ、Ⅲ段階になると二段に区切る沈線をも失うというように、とくに脚において退化の

傾向を看取することができた。

次に、従来の須恵器編年と比較しよう。田辺昭三の陶邑編年^⑩では、TK二〇九型式が、蓋杯や高杯の形態、法量および手法において、隼上りⅠ段階と似た様相を持っている。時期的に併行するものであろう。次のTK二一七型式は、示されている資料に変異が大きく、比較が容易でないが、隼上りⅡ、Ⅲ段階のものが含まれている。すなわち、少なくともTK二一七型式は、隼上りⅡ、Ⅲ段階に区分できるわけであるが、さらに時期の降る資料が含まれている可能性もある。なお、当該期の陶邑窯の良好な一括資料に、TK七九窯から窯詰めの状態で出土した須恵器がある。蓋杯の形態や法量などで隼上りⅡ段階のものに酷似しており、両窯の併行関係を考えるうえで重視できよう。

飛鳥地域の須恵器編年^⑪と比較すると、まず飛鳥Ⅱの標式資料である坂田寺SG一〇〇出土の須恵器は、蓋杯の身の口径が8cm余りで、最も縮小化の進んだものであり、隼上りⅢ段階で示した資料よりもやや小さい。また、共伴した杯A蓋は、Ⅲ段階の例と似た形態を呈している。ゆえに、隼上りⅢ段階を飛鳥Ⅱに比定しておく。一方、飛鳥Ⅰの標式資料である小壘田宮推定地SD〇五〇の出土遺物^⑫は、変異に富み、かなり時間幅を持つと推測できるが、隼上りⅠ、Ⅱ段階に相当するものが含まれている。とくに、杯A蓋の初現形態がわずかに含まれる点など、似た傾向が指摘できる^⑬。

いささか古い編年であるが、横山浩一による古墳出土須恵器の編年と比較しよう。横山編年では、海北塚式から荒坂式、桃谷式、野畑式へと、蓋杯の縮小傾向が看取できる。その法量および身のたちあがりの形態から、隼上りⅠ段階が荒坂式、隼上りⅡ段階が桃谷式、隼上りⅢ段階が野畑式と近似した様相を持っていることがわかる。とくに、桃谷式では、初現形態の杯A蓋と小形碗のセットを伴っており、隼上りⅡ段階との共通性が強い。横山編年の桃谷式や野畑式について、「変化が停滞した感じ」があるという批判^⑭があるが、隼上り窯の各段階とよく対応することをみてもわかるように、飛鳥時代の須恵器の変遷を明確に捉えた編年であると評価できよう。

従来の研究では、この時期の須恵器編年においては、杯A蓋の出現がメルクマールにされることが多かった。そして、

蓋杯と杯A・杯A蓋との共存を考えない編年案も多い。たとえば、中村浩による陶邑編年¹⁸では、隼上りⅡ段階に相当するもののうち、蓋杯をⅡ型式六段階、杯A・杯A蓋をⅢ型式一段階とし、両者を先後関係として扱っている¹⁹。しかしながら、杯A・杯A蓋は、蓋杯が変化して成立するのではなく、蓋杯が行われている一方で別の新たな器形として出現し、次第に量的に増大し、最後に蓋杯に取って替ったという推移が、隼上り窯における須恵器編年からみて明らかである。そして、地域によっては、杯A蓋の初現の時期に差があることも十分予想される。また、蓋杯の消滅は、畿内では杯A蓋が定型化する時点でみとめられるが、さらに遅れる地域もあろう²⁰。これらの点から、杯A蓋や蓋杯の有無でもって時期を推定することは、危険であると言えよう。また、定型化前の杯A蓋は、器形として不安定であるので、単独で年代の指標に用いるには危険が大きい。したがって、当該期の須恵器の年代を考えるうえでは、蓋杯や高杯にみられる特徴、とくに口径の縮小傾向をはじめとする退化現象を重視すべきであると考えられる。

2 年代の定点の須恵器

次に、年代の定点として重要な位置を占める、瓦陶兼業窯および寺院・宮殿下層出土の須恵器について検討を加えよう。須恵器の年代を考えるうえで重視しなければならない初期の瓦陶兼業窯としては、隼上り窯のほかに、楠葉平野山窯²¹、幡枝元稻荷窯が挙げられる。楠葉平野山窯では、とくに、四天王寺創建時の軒丸瓦と共伴した三号窯の最終床面の須恵器²²（図二—9—12）が重視できる。蓋杯の身のたちあがりは矮小化し、口径は、身がほぼ一〇cm、蓋が一〇cm前後で、身の底部および蓋の天井部にヘラ切り後の調整が施されないものが多い。これらの特徴は、隼上りⅡ段階との共通性を明示している。なお、床面上で出土した蓋は、扁平なつまみを持ち、壺類の蓋の可能性も否定できないが、天井部に丁寧なヘラ削りを加える点など、隼上りⅡ段階の杯A蓋に似ている。このほか、同じく創建瓦を焼成した七号窯（楠葉東遺跡内第五瓦窯²³）第一次窯体の最終床面から、三号窯最終床面出土例とほぼ同じ形態、調整を持つ蓋杯が出土している（同7、8）。両窯の

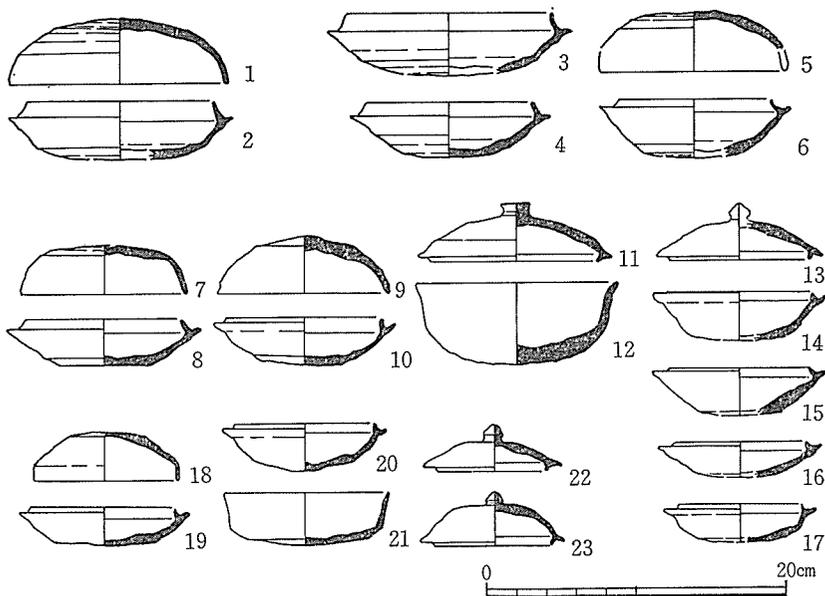


図2 年代の定点の須恵器

(1, 2: 飛鳥寺下層, 3~6: 法隆寺下層, 7~12: 楠葉平野山窯, 13~17: 川原宮下層, 18~23: 前期難波宮下層, 縮尺5分の1)

例がともに最終床面という出土状態であることを考え合わせると、四天王寺創建瓦の焼成は、隼上りⅠ、Ⅱ段階であるとみてよからう。

幡枝元稻荷窯の須恵器は、身に短いたちあがり付き、底面を粗雑に仕上げた蓋杯が圧倒的で、内面にかえりを持つ杯A蓋は一例のみと報告されている^④。高杯には、脚に二段の切り込み状の透しを持つものと、透しの全くないものがある。蓋杯および高杯の特徴、それに杯A蓋がわずかに存在する点を考慮すると、隼上りⅡ段階と似た様相を持つことがわかる。これは、田辺昭三が自らの編年のなかで、TK二〇九型式とTK二一七型式の間に、幡枝元稻荷窯を位置づけていること^⑤とも一致しよう。

寺院・宮殿下層の須恵器として、飛鳥寺、川原寺（川原宮）、難波宮の出土例に加えて、法隆寺若草伽藍の出土例が知られている。以下、検討を加えよう。

飛鳥寺創建前の包含層から出土した須恵器のうち、上層出土例（図二一1、2）は、飛鳥寺造宮の直前の様相を示すものと認められている^⑥。蓋杯の身は、やや長

いたちあがりを持ち、口径も一三cmで、隼上りⅠ段階のものより退化の度合いが少ない。その蓋は、口径一四cmで、天井部と口縁部の境が鈍い稜をなしている。これらの特徴から、隼上りⅠ段階に先行する段階、すなわち海北塚式（TK四三型式）に属すると考えられる。

一九八二年度の法隆寺境内の発掘調査において、若草伽藍西塀の造営に際して埋めたてられた溝、SD二一四〇が検出され、造営工事に伴うとみられる木材の削り屑とともに土器が出土している（同3～6）。須恵器蓋杯の身は、口径一四cmと大形で、比較的しっかりとしたたちあがりを持つもの（同3）と、口径一〇～一二cmで、短いたちあがりのもの（同4、6）がある。前者は、前述の飛鳥寺下層の資料に近似し、後者は、たちあがりの形状や口径を含めて考えると、隼上りⅠ段階ないしⅡ段階に比定できる。建物下層にあっては、最も新しい資料が建物築造の年代に近いということを考えると、若草伽藍の造営が隼上りⅠ、Ⅱ段階に行われていたと推測できる。

川原寺の発掘調査において、川原宮造営のために埋めたてられたと考えられる沼の埋土から、土器、木製品が出土している。須恵器は、蓋杯の身が口径八～一〇cmで、極めて矮小化したたちあがりを持つ（同14～17）。つまみの部分を欠くが、杯A蓋とみられるもの（同13）も出土している。口径が著しく小さい点を考慮すると、隼上りⅢ段階のものが主体を占めると理解できよう。

難波宮では、前期難波宮の整地土の下で、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が検出され、多数の遺物が出土している。そのなかで、前期難波宮の造営直前の様相を示す資料として整地土出土の土器が挙げられる（同18～23）。蓋杯の身（同19～20）は、口径九cm前後で、たちあがり極めて矮小である。その蓋（同18）も、それに対応して小形化している。杯A蓋（同22、23）も、一〇cmに満たない小形品で、宝珠形つまみが付く。これらの点から、川原宮下層に似た様相を持つことがまとめられる。前期難波宮の整地の直前が、隼上りⅢ段階にあたるとみてよい。

以上の検討で得られた結果を整理すると、以下の通りである。

- a 飛鳥寺の造営は、隼上りⅠ段階に先行する海北塚式（TK四三型式）を溯らない。
- b 法隆寺若草伽藍の造営は隼上りⅠ、Ⅱ段階を中心に行われている。
- c 四天王寺創建瓦は、隼上りⅠ、Ⅱ段階に生産されている。
- d 北野麁寺の創建瓦の生産の一点が、隼上りⅡ段階にある。
- e 豊浦寺所用瓦の生産の開始は、隼上りⅠ段階である。
- f 川原宮、前期難波宮の造営は、隼上りⅢ段階よりも降る。

このように、寺院・宮殿の造営を須恵器編年によって捉えることができた。これらの点をもとに、寺院・宮殿の相対的な造営順序を明らかにすることができる。すなわち、須恵器の型式の変遷から、飛鳥寺の造営が最も古く、つづいて法隆寺の造営が開始され、それと同時に、あるいはやや遅れて、四天王寺、豊浦寺、北野麁寺の造営が行われたことがわかる。また、これらの諸寺に遅れて、川原寺や前期難波宮の造営が着手されていることも、須恵器の型式差から明らかである。この造営順序と、文献資料から得られる年代を比較検討することから、須恵器編年の絶対年代を定めることができる。ただし、法隆寺、四天王寺、豊浦寺など、創建年代に諸説のある場合も多いので、まず、最も確実な年代が与えられる寺院・宮殿から検討を始め、先に挙げた諸寺の創建諸説を検証しながら、考察を進めていくことにしよう。

確実な造営の年代がわかる遺跡として、飛鳥寺が挙げられる。その創建に関する記録のなかで、最も信用できるのは、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下『元興寺縁起』と略記する）に引かれている塔露盤銘である。²⁰ その記述から、戊申年（五八八年）に百濟から法師、工人の渡来を得て造営が開始され、丙辰年（五九六年）に露盤が上げられた、すなわち塔が完成したことが知られる。この年代と、先の検討の結果 a から、隼上りⅠ段階以前の海北塚式（TK四三型式）が五八八年を年代の一点に持つことがわかる。

次に、前期難波宮については、発掘調査の進展により、考徳朝の長柄豊碓宮とみる見方が、有力になってきている。²¹ 長

絶対年代	隼上り窯	田辺編年	横山編年	瓦 陶 兼 業 窯	寺院宮殿下層
600年		TK43	海 北 塚		<ul style="list-style-type: none"> □ 飛鳥寺下層 □ 法隆寺下層 □ 川原宮下層 □ 難波宮下層
	隼上り I	TK209	荒 坂		
	隼上り II	TK217	桃 谷		
隼上り III	野 畑				
650年		TK46			

図3 須恵器編年と年代の定点（瓦陶兼業窯は、操業の全期間を示す）

柄豊碕宮は、『日本書紀』の記載から、白雉三年（六五二年）九月の完成が知られている。その造営の開始時は明確ではないが、宮の堺標を立てた白雉元年（六五〇年）を整地の開始時と考えてよいであろう。また、川原宮については、斉明紀元年（六五五年）に、板蓋宮が焼けて川原宮に遷るといふ記事があり、それ以前から存在していたことがわかる。この両宮殿の年代とfから隼上りⅢ段階の下限が七世紀半ば頃にあると考えられる。

ここまでの検討の結果、隼上りⅠ段階からⅢ段階が六世紀末から七世紀前半であることが判明した。それを細分していくために、法隆寺、四天王寺などの創建年代を検討していかねばならない。法隆寺については、『日本書紀』の推古一四年の水田施入の記事や、薬師像光背の造像記は、疑いが多く信用しがたい降って、癸未年（六二三年）の造像が記されている釈迦像光背銘については、問題点が少なく、^⑤ 確実な年代を示す史料とみなされている。ゆえに、推古三一年（六二三年）までに法隆寺が存在していたと認めることができる。四天王寺も、法隆寺と同様、創建について不確かな点が多い。とくに、『日本書紀』による崇仏論争に関連する発願記事は、説話性が強く、年代を信用できない。一方、推古紀三一年（六二三年）七月条に、新羅、任那から仏像、舍利などが贈られ、仏像を葛野秦寺、舍利、灌頂幡を四天王寺に納めたという内容の記事がある。仏像、舍利、幡などは、寺院の造営の過程で必要なもので、六二三年には、法隆寺のほかに、四天王寺、葛野秦寺の造営が行われていたことがわかる。と

ここで、葛野秦寺は、秦氏による造営が明らかである蜂丘寺、すなわち広隆寺に比定する考え方が一般的であるが、田中重久は、葛野郡の郡名寺院、葛野寺と考え、その略称とみなせる野寺の推定地である北野麩寺に比定している⁵³。幡枝元福荷窯との関連で注意されよう。

豊浦寺については、『元興寺縁起』に創建の事情が詳述されているが、福山敏男が論破しているように、この文献は豊浦寺の由緒をより荘厳にする目的で著されたものである⁵⁴。そこに記された創建年代を信用することはできない⁵⁵。一方、福山敏男は舒明朝に降って、蘇我蝦夷による造営の可能性を推測しているが、この説にしても根拠は乏しい。むしろ、瓦窯の須恵器の型式からみて、法隆寺や四天王寺の造営と併行する可能性が高いことを重視すべきであろう⁵⁶。すなわち、七世紀第1四半期に豊浦寺の造営が着手されていると考えられる⁵⁷。

以上、創建年代に諸説のある寺院について検討を加えたが、その結果、少なくとも、六二三年以前に、法隆寺、四天王寺などの寺院の造営が始まっていたことがわかる。このことと、先の検討の結果の**b**、**c**を合わせて考えると、隼上りⅠ段階を六世紀末から七世紀第1四半期、Ⅲ段階を七世紀第2四半期に比定することができる。現状では、隼上りⅠ段階とⅡ段階の境を明らかにする手がかりを持たないが、一応、六一〇年頃に考えておきたい。また、検討の過程で得られた寺院の創建年代は、文献だけではなく、遺物の相對編年とも矛盾しないので、妥当な年代とみてよからう。

① 樋口隆康「須恵器」『世界陶磁全集』1 日本古代編、一九五八年。

② 横山浩一「手工業生産の発展」『世界考古学大系』第三卷 日本Ⅲ 古墳時代、一九五九年。

③ 横山浩一・吉本堯俊「京都市轡枝の瓦陶兼業窯跡」『日本考古学協会昭和三十八年度大会研究発表要旨』、一九六三年)。なお、当窯は、学史上「幡枝窯」と呼びならわされているが、京都市では「元福荷窯」として遺跡地名表に登録されており、本稿では、幡枝元福荷窯と表現する。

④ 内面にかえりを持つ、つまみ付きの杯蓋(杯A蓋)の出現時期について、飛鳥地方の編年をはじめとする多くの編年が七世紀初頭に考えるのに対し、白石太一郎は、「七世紀第2四半期でも中葉に近い年代」に比定している。なお、白石の須恵器の年代決定法は、瓦陶兼業窯での瓦との共伴例、寺院・宮殿下層出土資料にもとづく方法をとっているが、瓦当文様の型式差に任意に年代差を付与する点、豊浦寺舒明朝説を無批判に受けられている点など、首肯しがたい点がある。白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一

集、一九八二年)。

⑤ 宇治市教育委員会『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第三集、一九八三年)。

⑥ 後述するように、杯A蓋には小形の椀の蓋である可能性を持つものが含まれる。多くの場合、その識別は困難であり、形態のうえでも差を伴わないので、同一の器形として扱い、杯A蓋の名称と呼ぶことにする。

⑦ 隼上り窯D(図七-13)。二章1節参照。

⑧ 報告書未掲載。杉本宏氏の御厚意で実測させていただいた。

⑨ なお、二号窯最終床面からは、宝珠つまみの付く大形の椀蓋が出土している。

⑩ 田辺昭三『陶邑古窯址群』I(平安学園『研究論集』第一〇号、一九六六年)。

⑪ 大阪府教育委員会『陶邑』IV(『大阪府文化財調査報告書』第三一輯、一九七九年)。

⑫ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II(『奈良国立文化財研究所学報』第三一冊、一九七八年)。

⑬ 奈良国立文化財研究所「坂田寺跡の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』三、一九七三年)。

⑭ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』I(『奈良国立文化財研究所学報』第二七冊、一九七六年)。

⑮ 飛鳥地方の土器編年を進めた西弘海は、一九八三年に新たな須恵器編年を発表している。そこでは、飛鳥寺下層につづいて、小墾田宮S D〇五〇、小墾田宮包含層を経て、坂田寺跡S G一〇〇に至る須恵器の変遷が示された。包含層という関係の明らかでない資料に依拠している点で問題が残るが、蓋杯の小形化や蓋杯と杯Aのあり方など、隼上り窯における変遷と極めて似た推移が読みとれる。西弘海「法隆

寺出土の七世紀の土器」(法隆寺「法隆寺昭和三十九年調査秘宝展図録」一、一九八三年)。

⑯ 横山浩一「手工業生産の発展」(前掲)。

⑰ 森浩一・石部正志「後期古墳の討論を回顧して」(『古代学研究』第三〇号、一九六二年)。

⑱ 中村浩「大野池、光明池地区の須恵器編年に因する諸問題」(大阪府教育委員会『陶邑』I、大阪府文化財調査報告書 第二八輯、一九七六年)、中村浩「出土遺物の分類と編年」(大阪府教育委員会『陶邑』II、大阪府文化財調査報告書 第二九輯、一九七七年)、中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」(大阪府教育委員会『陶邑』III、大阪府文化財調査報告書 第三〇輯、一九七八年)。

⑲ なお、中村浩は、杯A蓋の出現するⅢ型式一段階の須恵器について、「前型式最終段階との重複部分がかなりの割合を占めていることが判る」と述べ、蓋杯と杯A蓋・杯Aが共存することを事実上認めている。中村浩「出土遺物の分類と編年」(前掲)。

⑳ たとえば山陰地方では、鳥取県陰田横穴の出土須恵器の検討から、蓋杯の消滅や杯A蓋の出現が畿内に遅れることが推測されている。萩本勝「須恵器について」(『米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団「陰田」一般国道九号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、一九八四年)。

㉑ 枚方市北楠葉町と八幡市橋本にまたがり、枚方市側の調査で楠葉東遺跡内に瓦窯として扱われたのち、八幡市側で平野山瓦窯として調査された。本稿では、楠葉平野山窯と呼んでおく。各窯の名称については、窯体を検出した八幡市側の呼び方に従う。西田敏秀「楠葉東遺跡内第五瓦窯」(『枚方市文化財年報』I、一九八〇年)、八幡市教育委員会『平野山瓦窯跡発掘調査概報』(一九八五年)。

㉒ 八幡市教育委員会『平野山瓦窯跡発掘調査概報』(前掲)。

- ⑳ 瀬川芳則「四天王寺瓦窯址と出土の須恵器」『考古学と古代史』同社大学考古学シリーズ、一九八二年。
- ㉑ 横山浩一・吉本堯俊「京都市轅枝の瓦陶窯窯跡」(前掲)。
- ㉒ 田辺昭三「飛鳥・奈良期の須恵器」『日本美術工藝』第三九三号、一九七一年)、田辺昭三『須恵器大成』(一九八一年)四三頁。
- ㉓ ところで、兵庫県の高丘窯も、年代の定点として取り扱われることが多かった。しかし、その須恵器をみると、口縁部が屈曲する杯身があるなど地方色がみとめられるので、畿内の編年との対比が困難である。ゆえに、年代の定点としては保留する。なお、蓋杯が稀である点や、杯A蓋が乳頭状つまみを持ち、その初現形態に近い点などから、一応、準上りⅢ段階との併行関係を想定しておく。兵庫県教育委員会『明石高丘地区埋蔵文化財調査略報』(一九六八年)。
- ㉔ 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報)第五冊、一九五八年。
- ㉕ 法隆寺『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』(一九八五年)。
- ㉖ 奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報)第九冊、一九六〇年。
- ㉗ 中尾芳治・喜谷美宣「難波宮整地層下の遺物略報」(難波宮址の研究)研究予察報告第四、一九六一年)、大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第七(一九八一年)ほか。
- ㉘ 中尾芳治「前期難波宮をめぐる諸問題」(『考古学雑誌』第四六巻第一二号、一九三五年)。
- ㉙ 福山敏男「飛鳥寺創立に関する研究」(『史学雑誌』第四五巻第一〇号、一九三四年、『日本建築史研究』再収、一九六八年)。
- ㉚ 中尾芳治「前期難波宮をめぐる諸問題」(前掲)。
- ㉛ 福山敏男「法隆寺流記資財帳の研究」(『夢殿』第二冊法隆寺の諸問題、一九三四年)、同「法隆寺の金右文に関する二三の問題」(『夢殿』第三冊法隆寺の銘文、一九三五年)。
- ㉜ 追刻を考える意見もあるが、用語・文体・書風から推古朝のものとする意見が有力である。町田甲一「釈迦三尊像(金堂)」(『奈良六大寺大観』第二巻、法隆寺二、一九六八年)。
- ㉝ 田中重久「広隆寺創立の研究」(『聖徳太子御埋蹟の研究』、一九四四年)。
- ㉞ 福山敏男「豊浦寺の創立に関する研究」(『史学雑誌』第四六巻第一二号、一九三五年、『日本建築史研究』再収、一九六八年)。
- ㉟ これは、豊浦宮の施入によるとする推古二年説にとって有利な結論である。

二 瓦生産の展開と工人の系統

生産技術の保持者である瓦工(瓦師)の動向は、瓦生産の展開のなかで重要な位置を占める。また、寺院の造営をめぐって、その建立者との関わりを知るうえで重要である。この動向を明らかにしていくためには、瓦そのものをとりあげ、文様や製作技術から生産者の系統を復原していく作業が有効であろう。その際、文様を持つことから、資料化が比較的進

んでいる軒丸瓦を、主たる検討の材料にする。

ところで、系統の問題を扱ううえで欠くことのできないのが、年代の枠組である。先に触れたように、七世紀前半に創建されたと考えられる寺院について、文献によって確実な年代の得られる場合は少ない。また一ヶ寺の創建に数種類の軒瓦が用いられることも多く、そのなかでの新旧関係や年代差を認定するのに、しばしば困難が伴う。そこで、一章で提示した須恵器の年代をもとに、窯跡における共伴関係や検討の過程で得られた寺院の創建年代を定点として、軒瓦の編年を行うことが最も有効であると考えられる。

1 軒瓦の編年

軒瓦の編年を行うとき、瓦当文様の退化に年代差を付与していく方法がよくとられる。^①しかし、文様の退化の速度は一定でなく、模倣によって生ずる退化型式が原型式とほぼ同時に存在することもしばしばみられる。また、七世紀前半に關してみれば、軒丸瓦の文様が単純であり、退化の要素が乏しく、組列を決定することにも困難が伴う。そこで、本章では、文様の構成や細部表現において強い共通性によってまとめられる一群の瓦に、先述した年代の定点から年代を付与していくという方法をとることにする。以下、それぞれの軒丸瓦のまとめりについて述べ、その年代について検討するが、代表的な寺院を標式名として使用する。

飛鳥寺式 飛鳥寺出土瓦のうち、弁端が桜花状の切り込みの表現をもつもの（飛鳥寺A、^②図七一）は、同寺の七世紀中頃以前の軒丸瓦のなかで五五%を占め、創建時に主体となった瓦である。これと同範の瓦が京都府高麗寺にあるほか、強い共通性を持つものが奈良県坂田寺、^④姫寺に存在する。これらの一群を飛鳥寺式と呼ぶことにしよう。年代は、飛鳥寺草創の瓦であることから、六世紀末を始点にもつ。なお、幡枝元稻荷窯出土の弁端切り込みの例は、中房が大形化しており、飛鳥寺Aからは飛躍がある。年代も、一章で検討したように、六一〇年代を中心とし、飛鳥寺例よりも降る。

若草伽藍式

直線的な間弁を持つ角端点珠軒丸瓦のうち、九弁、一〇弁、一一弁のものは、中房がやや大きく、その断面が角ばっているのに対し、均等な割り付けの八弁のものは、いずれも縁の丸い小さな中房を持つ。ゆえに、両者を別のグループとして区別することができる。前者に属する九弁のものが、法隆寺若草伽藍で最多数を占めて出土しており(法隆寺A、図五―3)、創建の中心になった瓦であると考えられる。飛鳥寺においても、一一弁の例(飛鳥寺B、同1)と九弁の例(飛鳥寺C、同2)が出土しているが、前者は、同寺出土の七世紀半ば以前の瓦のなかで三七%を占め、飛鳥寺Aに次ぐ。飛鳥寺Cは、同じ範で作られた瓦(同範瓦)が豊浦寺、御所上増麿寺に存在するが、この飛鳥寺Cの瓦範に彫り加えを施して法隆寺A₁が成立したことが明らかになっている。このほか、若草伽藍式に属するものに、九弁の奈良県巨勢勢例があり、一〇弁の大阪府新堂麿寺出土例も含まれよう。年代については、法隆寺Aにより、七世紀第一四半期には行われていることが明らかであるが、さらに、飛鳥寺Bが飛鳥寺Aとともに創建瓦の大半を占めるので、六世紀末に出現が溯る可能性もある。

奥山久米寺式

先に述べた角端点珠軒丸瓦のうち、均等な八弁の割り付けのものは、強い共通性を持つまとまりとして扱うことができる。楠葉平野山窯B、天神山窯(図七―4)、今池窯の窯跡出土例のほか、奥山久米寺、平隆寺、中宮寺、横井麿寺、京都府正道遺跡、同府久世麿寺などに出土例がある。奥山久米寺で少なくとも二種類がみとめられるので、標式名としておく。ところで、奥山久米寺式軒丸瓦と同じ文様を内区に持ち、外区に珠文を巡らせる蓮華文鬼板が、奥山久米寺、豊浦寺、平吉遺跡、天神山窯および岡山県末の奥窯から出土し、その退化型式が同県箭田麿寺(吉備寺)から出土している。これらの蓮華文鬼板についても、奥山久米寺式の軒丸瓦と系統を同じくするものとして扱えよう。奥山久米寺式の年代は、明確な定点に乏しいが、楠葉平野山窯で四天王寺創建瓦に続いて生産されたと推測でき、七世紀第二四半期を中心に考えることができる。この点については、後述する船橋麿寺式軒丸瓦との共伴が、天神山窯や末の奥窯において想定できることなども、傍証として挙げることができる。

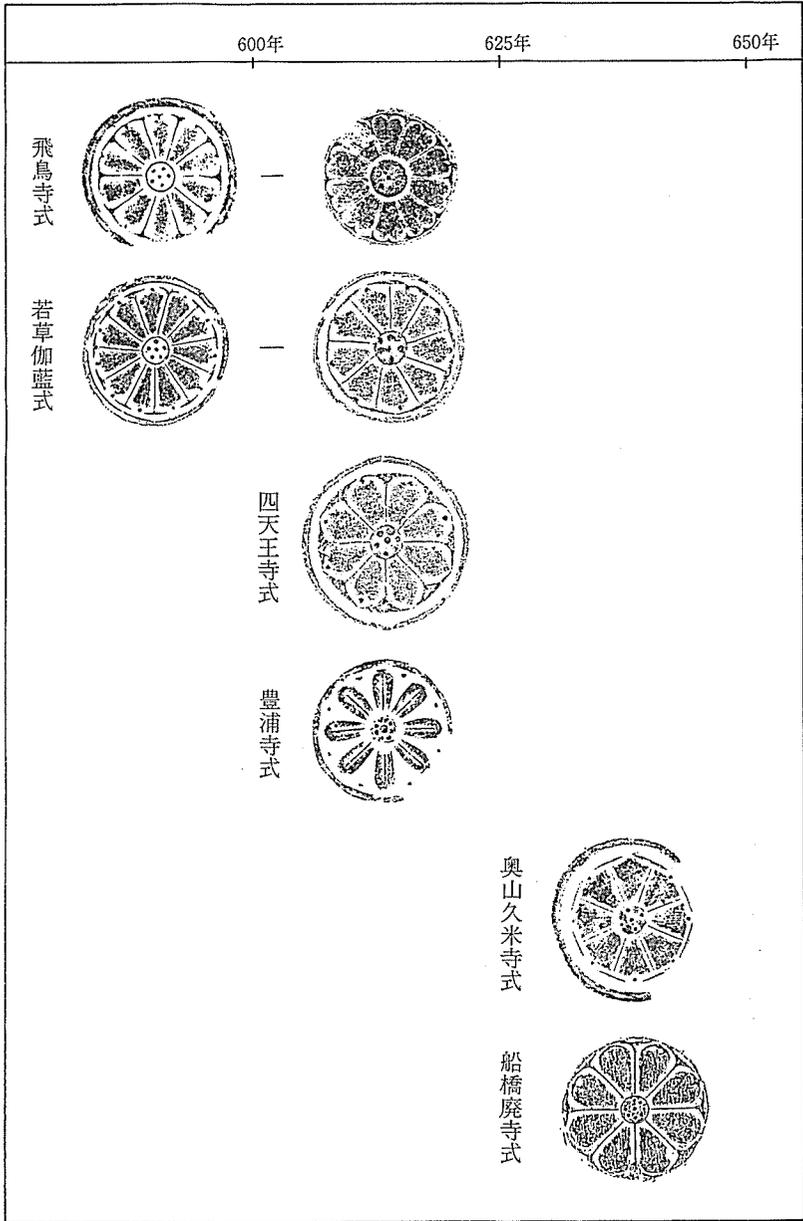


図4 初期の主要な軒丸瓦の編年の編年(約8分の1)

四天王寺式 楠葉平野山窯で出土している円端点珠単弁八弁軒丸瓦(図六一②④)は、法隆寺、四天王寺、法円坂麿寺で同範瓦が出土する。範の傷み具合から、法隆寺例(同①)が先に生産されたことが判明しており、楠葉平野山窯では、四天王寺の各例に相当するものが出土している。この瓦は、むしろ、四天王寺造営において主体をなしたと考えられるので、四天王寺式と呼ぶ方がよからう。標式例と強い共通性を持つものはほとんどないが、模倣によると考えられるものが、法隆寺や四天王寺に多くみられる。年代は、初現する法隆寺をはじめ、楠葉平野山窯、四天王寺から与えられ、一章で検討したように、六一〇年代、六二〇年代であることが推測できる。

豊浦寺式 肉厚な花弁の中央に稜を持ち、弁間に珠点を配する単弁軒丸瓦は、「高句麗系」軒丸瓦の典型とされてきた。豊浦寺で最も多くの種類がみられる。弁端の形状から、円端、尖端に分ける意見もあるが、他の要素の共通性から、両者をまとめるべきであろう。豊浦寺出土例のなかでも、中房が突出し、花弁の狭長な例(隼上り窯A、図七一②)が原型式と認められる。豊浦寺式に属するものには、豊浦寺、隼上り窯のほか、平吉遺跡、奥山久米寺、大阪府国府遺跡(衣縫寺)、楠葉平野山窯の例があり、また、平隆寺、中宮寺、今池窯で出土している九弁の例は退化型式と判断される。ところで、幡枝元稱荷窯出土例、隼上り窯D(同③)は、有稜肉厚の花弁を持ち、「高句麗系」とされてきたのであるが、楔形の間弁を持つ点で差異がある。幡枝元稱荷窯の供給先である北野麿寺のほか、広隆寺にも同一文様の例があり、独自の展開が予測できるが、ここでは豊浦寺式の亜式として捉えておきたい。豊浦寺式およびその亜式の年代は、隼上り窯、幡枝元稱荷窯の須恵器に対する検討から、六一〇年代、六二〇年代を中心とすることがわかる。

船橋麿寺式 均等な八弁の割り付けを持ち、やや肉厚な花弁の先端が肥厚して稜をなす単弁軒丸瓦は、同じ文様のものが多く存在する。それらは、中房断面が半球形に近いという特徴でも共通し、いずれも直径一八cm前後で、前述してきた諸式よりも大形である。大和では、豊浦寺、法輪寺、和田麿寺、天神山窯、河内では、船橋麿寺、国府遺跡(衣縫寺)、西琳寺などに出土例があり、末の奥窯例も当式に属する。高丘窯出土例は、弁端の形状に相違があるが、このグループの

なかに含めて考えることができよう。瓦当径が大形化していることから、年代が降ることが予想できるが、高丘窯で共伴している須恵器の年代から、七世紀第二四半期を中心に考えておく。

以上、年代を明らかにしうる七世紀前半の軒丸瓦について検討を行った。このほかにも、当該期に行われていたと考えられる瓦があるが、孤立した文様を持つものや、年代の手がかりのないものについては、資料の増加を待つことにしたい。ここでは、前述の検討で得られた年代観をもとに、初期瓦生産の展開について、若干の整理を試みておこう。

飛鳥寺式、若草伽藍式、四天王寺式、豊浦寺式が七世紀第一四半期までに行われた主要な軒丸瓦であり、七世紀第二四半期には、奥山久米寺式や船橋廃寺式などが加わるが、先に行われていた諸式の退化型式も存在していると考えられる。坂田寺SG一〇〇出土の単弁七軒丸瓦^④のように、孤立した文様を持つもののなかには、七世紀第二四半期に属するものが多いのではないかと想像される。法隆寺では、弁中の忍冬文を置く単弁六軒丸瓦が七世紀第二四半期に比定されており、^⑤四天王寺式の退化型式とともに行われていたことが推測される。このように、七世紀第二四半期になって、軒丸瓦が多様になっていくことがうかがえる。また、奥山久米寺式や船橋廃寺式でみたように、出土寺院の分布の拡大があとづけられ、造寺活動の急速な普及が推測される。

2 瓦工の系統

七世紀第二四半期の多様なあり方を生み出す背景を考えるうえで、当時の瓦工の動向に注目しなければならない。その動向を明らかにしていくためには、先に挙げた諸式の瓦の製作技術に検討を加えることから、その系統関係を復原する作業が有効であろう。その際、前節で得られた軒瓦の年代を留意することにより、動向の把握がより明確になると考える。

飛鳥寺の創建において主体をなして用いられた軒丸瓦に、飛鳥寺式の飛鳥寺Aと若草伽藍式の飛鳥寺Bがある。この二種の瓦は、飛鳥寺創建の諸堂塔を飾ったものであるが、両者の間には形態のうえで大きな差違がある。すなわち、飛鳥寺

Aが行基葺き用の丸瓦部を持つのに対し、飛鳥寺Bには、玉縁付きの丸瓦部が付き、屋根を葺くうえで相容れない方式をとっている。また、この二者の間では、製作技術のうえでも相違がみられ、飛鳥寺Aの丸瓦が格子叩き目を持ち、飛鳥寺Bの丸瓦が、薄手で平行叩き目を磨り消すものであることが明らかにされている。^⑭さらに、瓦当の成形において、飛鳥寺Aは、粘土板を重ねて押し込み、撫で調整を加えるという技法をとるのに対し、飛鳥寺Bは、瓦当中心がうず高く、その周りに同心円状の凹凸が観察できることから、成形において回転を利用していることが推測される。^⑮また、瓦当と丸瓦部の接合に際して、飛鳥寺Bでは円盤状の瓦当に沿わせるため、丸瓦先端部に何らかの調整を加え、片ほぞ状(ニ状)に作り出すという特徴的な技法を用いており、飛鳥寺Aと異なっている。この両者の時間的な関係、とくに、飛鳥寺BがAと同時、すなわち五八八年の瓦師の渡来によって現われたのか、やや降った時期に用いられ始めたのかという点については明らかでない。しかし、飛鳥寺造営という瓦生産のごく早い段階に、相異なるふたつの系統が存在する事実は、注目すべきことと言えよう。

飛鳥寺Bでみられた、回転利用の瓦当成形と接合に際しての片ほぞ状調整(以上を合わせて回転成形技法と呼ぶ)は、同じ若草伽藍式の飛鳥寺C、法隆寺A、新堂麁寺単弁一〇弁軒丸瓦、さらには、四天王寺式の法隆寺・四天王寺同範軒丸瓦(楠葉平野山窯A)においても用いられている(図五、図六)。とくに、四天王寺創建瓦においては、瓦当裏面の回転撫で調整の痕跡が明瞭である。また、回転成形技法による軒丸瓦は、完形品から推して、玉縁付きの丸瓦部を持つことが考えられる。^⑯その玉縁も、凹面を削るという手法でも一致し、製作技術の共通性が強い。このように、回転成形技法による若草伽藍式、四天王寺式軒丸瓦は、多くの要素で共通することが明らかであり、ひとつの技術上の系統とみなしうる。さらに、飛鳥寺、法隆寺、新堂麁寺、楠葉平野山窯などの出土遺跡での共伴関係をみると、回転成形技法の軒丸瓦は、凸面を全面撫で消す丸瓦・平瓦に対応するという点でも共通し、軒丸瓦だけでなく、瓦生産全体における工人の一系列として認めることができる。この系列のなかでの先後関係は、飛鳥寺Bが最も古く、九弁の飛鳥寺C、それと同範の豊浦寺、御所上増麁寺例が

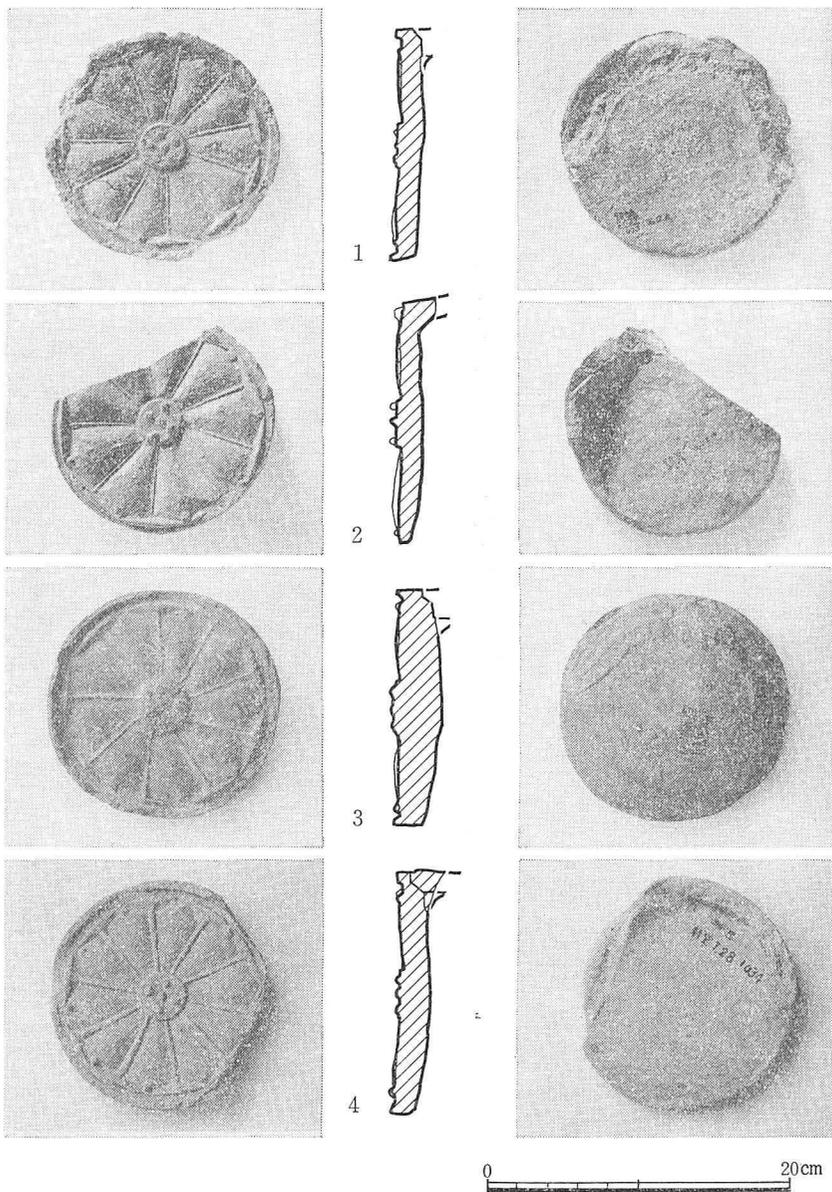


図5 初期の軒丸瓦(1)
 (1: 飛鳥寺B, 2: 飛鳥寺C, 3: 法隆寺A, 4: 新堂院寺, 縮尺5分の1)

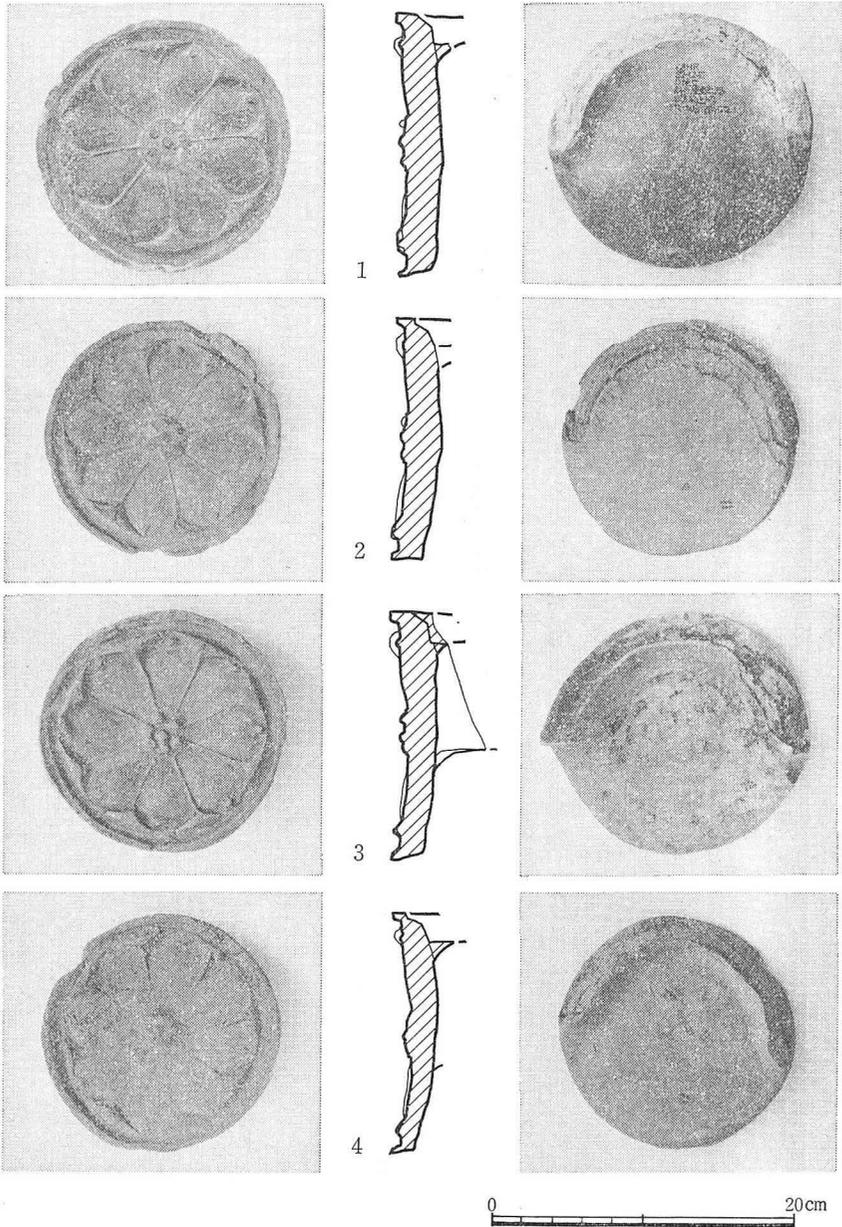


図6 初期の軒丸瓦(2)
 (1：法隆寺B, 2~4：楠葉平野山窯A, 縮尺5分の1)

つづき、その範に彫り加えを施した法隆寺例がその次にくる。法隆寺Aと法隆寺Bの先後関係は明らかではないが、須恵器との関係^⑧から、同時かBの方がやや新しいと推測できる。この法隆寺Bにひきつづいて四天王寺創建瓦が生産されたことが、範傷の具合からわかる。新堂廃寺例については、現状では系列のなかでの位置づけが難しい。

ところで、七世紀中葉に初現する「山田寺式」単弁軒丸瓦は、回転成形の明瞭な痕跡は留めないが、瓦当裏面中央がふくらみ気味になる点や、接合において、片ほぞ状の調整を丸瓦部に加えることからみて、回転成形技法による可能性を持つ。丸瓦が玉縁付きであることから、若草伽藍式や四天王寺式からの系譜を引くことが想定できよう。四天王寺の造営において、四天王寺式軒丸瓦に続いて「山田寺式」軒丸瓦が用いられ、楠葉平野山窯で両者が生産されていることも、この系譜関係を示唆するものと考えられる。以上の点から、回転成形技法は、飛鳥寺造営開始、あるいは、それよりもやや遅れて日本に伝えられ、法隆寺、四天王寺といった大寺院の造営にかかる瓦の生産に従事した工人によって使用された製作技術であり、初期瓦生産における瓦工の一流派の活動を示すと考えられる。

七世紀前半の軒丸瓦を通観すると、回転成形技法は、むしろ特殊な製作技術であることがわかる。飛鳥寺式や豊浦寺式では、回転成形を示す特徴、すなわち、瓦当裏面の同心円状凹凸や丸瓦部広端の片ほぞ状の調整をみとめることができな。また、両式はともに行基葺き用の丸瓦部を持ち、若草伽藍式や四天王寺式と異なる。一方、瓦当成形の手法についてみると、飛鳥寺式と豊浦寺式の間で差違がみとめられる。前者では、瓦当の調整に撫でを施すのにとどまり、しばしば指押さえ痕を残すのに対し、後者は、削り調整が多用されている。調整手法の差ではあるが、削り原体という工具の有無にもとづく違いであるので、工人集団の違いを示している可能性が考えられる。

ところで、七世紀第2四半期の奥山久米寺式は、文様からみて、若草伽藍式の系譜をひくものであるが、製作技術において、回転成形技法のな痕跡は明確ではない。また、行基葺き用の丸瓦部を持つ場合もあり、若草伽藍式でみられた対応関係が崩れていることがわかる。法隆寺や四天王寺で出土する若草伽藍式や四天王寺式の退化型式においても、回転成形

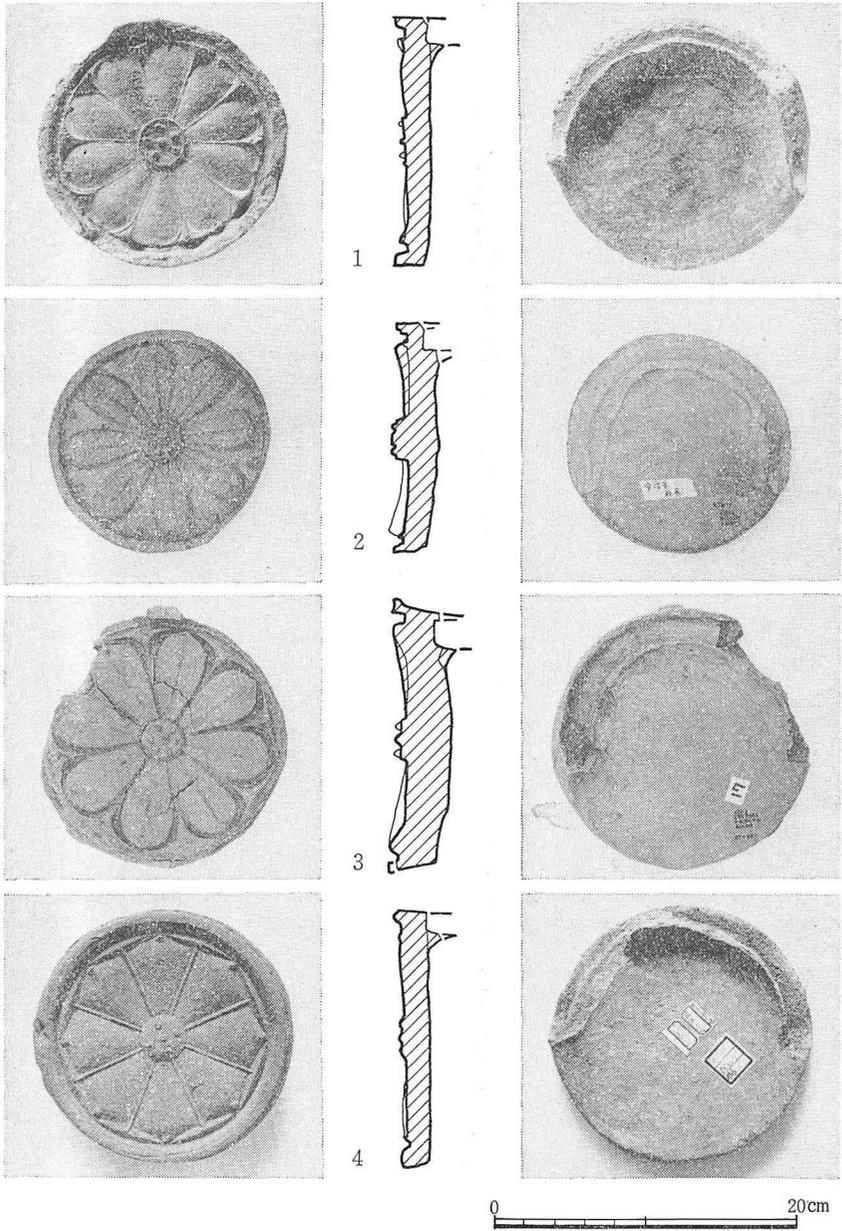


図7 初期の軒丸瓦(3)
 (1: 飛鳥寺A, 2: 隼上り窯A, 3: 隼上り窯D, 4: 天神山窯, 縮尺5分の1)

技法が失われ、対応丸瓦も異なるという現象がしばしばみられる。先に触れた、文様の多様性の増大や分布の拡大といった七世紀第2四半期の瓦生産のあり方とともに、この時期に瓦生産の拡大にともない、工人の分岐、交錯が頻繁になったことがうかがえる。

このような様相と比較すると、七世紀第1四半期までは、若草伽藍式・四天王寺式と回転成形技法、飛鳥寺式と撫で調整、豊浦寺式と削り調整というように、文様と製作技術の整然とした対応関係がみとめられる。この三者は、瓦生産技術の伝播直後に行われたものであるので、その間にみられる相違は渡来の系譜の差にもとづくことが予想される。そこで、百済で行われていた軒丸瓦をみると、回転成形技法によるものと撫で調整によるものが存在するが、回転成形技法による円端切り込みの単弁軒丸瓦が存在するなど、必ずしも日本でみられた文様と製作技術との対応関係がみとめられるわけではない。しかし、特徴的な瓦製作技術である回転成形技法が彼我でみられることは、工人の渡来の確証として評価してよからう。ところで、豊浦寺式軒丸瓦は、従来「高句麗系」と呼ばれ、高句麗の瓦の影響を持つものとして扱われ、あるいは、高句麗から百済を経由で渡来したことが推測されてきたが、同一の文様をもつ瓦は、朝鮮半島では出土していない。削り調整など製作技術の特徴を加えて、系譜を探索する必要がある。

以上、製作技術に対する検討から、瓦生産の伝播直後に少なくとも三系統の瓦工の流派が存在することを推測した。それらの三者と寺院の造営との関わりについてみると、飛鳥寺では飛鳥寺式と若草伽藍式、豊浦寺では若草伽藍式と豊浦寺式がみられるように、異なる系統の瓦が、ひとつの寺院において時期をあまり隔てることなく使用されていることが、しばしばみとめられる。また、回転成形技法による瓦は、法隆寺や四天王寺との結びつきが強いが、初現が飛鳥寺であり、豊浦寺や御所上増麿寺にも供給されている。少なくとも、ひとつの瓦工の流派が特定の寺院とのみ結びつく状況を想定することは困難である。さらに、生産地との関係を見ると、幡枝元稻荷窯や楠葉平野山窯のように、ひとつの瓦窯で異なる系統の軒瓦が出土することもあり、瓦窯における瓦工の交替、あるいは交錯をうかがうことができる。

- ① 代表的な例として、稲垣晋也「飛鳥白鳳の古瓦」『飛鳥白鳳の古瓦』(一九七〇年)が挙げられる。
- ② 奈良国立文化財研究所「飛鳥寺発掘調査報告」(前掲)の飛鳥寺I型式。
- ③ 梅原末治「高麗寺趾の調査」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第一九冊、一九三九年。
- ④ 奈良国立文化財研究所「坂田寺跡第二次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』五、一九七五年。
- ⑤ この角端点殊単弁軒丸瓦の二区分は、近江昌司の意見に近い。近江昌司「五条市天神山瓦窯の遺跡と遺物」『国学院雑誌』第七八巻第九号、一九七七年。
- ⑥ 奈良国立文化財研究所「南都七大寺出土軒瓦型式一覽(一)法隆寺」(一九八三年)の3B、3C型式。なお、3Bを法隆寺A₁、3Cを法隆寺A₂とする。
- ⑦ 文化庁記念物課「法隆寺若草伽藍跡 昭和四三年度発掘調査概報」(一九六八年)。
- ⑧ 飛鳥寺II型式。
- ⑨ 飛鳥寺VI、VII型式。なお、VII型式を飛鳥寺C₁、VIII型式を飛鳥寺C₂とする。
- ⑩ 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」(一九三六年) 図版第一七。
- ⑪ 奈良国立博物館「飛鳥白鳳の古瓦」(前掲)。
- ⑫ 上原真人氏の御教示による。上原真人「仏教」『岩波講座日本考古学』四 集落と祭祀、一九八六年。
- ⑬ 保井芳太郎「大和上代寺院志」(一九三二年) 図版第三六。
- ⑭ 大阪府教育委員会「河内新堂・鳥舎寺跡の調査」『大阪府文化財調査報告書』第二二輯、一九六一年。
- ⑮ 保井芳太郎「大和上代寺院志」(前掲) 図版第五六の今池出土例。
- ⑯ 保井芳太郎「大和上代寺院志」(前掲) 図版第九。
- ⑰ 檀原考古学研究所「三郷町平隆寺」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第四七冊、一九八四年。
- ⑱ 稲垣晋也「旧中宮寺跡の発掘と現状」『日本歴史』第二九九号、一九七三年。
- ⑲ 保井芳太郎「大和上代寺院志」(前掲) 図版第六六。また、付近に存在する瓦窯(横井窯跡群)からも出土している。西崎卓哉・中井公・立石堅志・西村康「横井窯跡群の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和五九年度、一九八五年。
- ⑳ 高橋美久二・近藤義行「正道遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第一集、一九七三年。
- ㉑ 近藤義行・梶本敏三・鷹野一大郎「久津川遺跡群発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第一〇集、一九八一年。
- ㉒ 奈良国立文化財研究所「奥山久米寺蓮華文鬼瓦」『文化財論叢』(前掲)。
- ㉓ 奈良国立文化財研究所「平吉遺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』八、一九七八年。
- ㉔ 近江昌司「五条市天神山瓦窯の遺跡と遺物」(前掲)。
- ㉕ 井内功「角端点殊形式花弁の蓮華文つき棟端飾板について」『井内古文化研究室報』一、一九六九年。
- ㉖ 帝室博物館「天平地宝」(一九三七年) 図版一〇五。
- ㉗ 八末久栄「大極殿出土の新型軒瓦二点」『難波宮跡研究調査年報』一九七二、一九七三年。
- ㉘ 法隆寺Bとする。奈良国立文化財研究所「南都七大寺出土軒瓦型式一覽(一)法隆寺」(前掲)の4A型式。
- ㉙ 法隆寺と四天王寺の間の同范関係を最初に指摘し、その後関係を明らかにしたのは、藤沢一夫である。藤沢一夫「四天王寺出土の古代屋瓦」『仏教芸術』五六号、一九六五年。

- ③⑥ 文化財保護委員会『四天王寺』(『埋蔵文化財発掘調査報告』第六、一九六七年)。
- ③⑦ 藤沢一夫「屋瓦の変遷」(『世界考古学大系』第四卷 日本Ⅳ歴史時代、一九六一年)。
- ③⑧ 大阪府教育委員会「国府遺跡発掘調査概要」Ⅹ(一九七九年)。
- ③⑨ 山城郷土資料館の特別展「山城の古瓦展」において展示。
- ③⑩ 保井芳太郎「大和上代寺院志」(前掲) 図版第五六。
- ③⑪ 奈良国立博物館「飛鳥白鳳の古瓦」(前掲) 八一。
- ③⑫ 藤澤一夫「山城北野廃寺」(『考古学』第九卷第二号、一九三八年)。
- ③⑬ 石尾政信「広隆寺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第五冊 1-2、一九八二年)。
- ③⑭ 奈良国立文化財研究所「法輪寺塔基壇の発掘調査」(『奈良国立文化財研究所年報』一九七三年、一九七四年)。
- ③⑮ 奈良国立文化財研究所「和田廃寺の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』五、一九七五年)。
- ④⑩ 奈良県立橿原公苑考古博物館「大和考古資料目録」第一集(一九七一年) 一一八頁。
- ④⑪ 原口正三「河内船橋遺跡出土遺物の研究」(『大阪府文化財調査報告』第八輯、一九五八年)。
- ④⑫ 大阪府教育委員会「国府遺跡発掘調査概要」(『大阪府文化財調査概要』一九七〇年度、一九七一年)。
- ④⑬ 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」(前掲) 図版第三二〇。
- ④⑭ 奈良国立博物館「飛鳥白鳳の古瓦」(前掲) 三三三。
- ④⑮ 兵庫県教育委員会「明石高丘地区埋蔵文化財調査略報」(前掲)。
- ④⑯ 奈良国立文化財研究所「坂田寺跡の調査」(前掲)。
- ④⑰ 森都夫「若草伽藍の瓦」(法隆寺「法隆寺発掘調査概報」Ⅱ、一九八三年)。
- ④⑱ 奈良国立文化財研究所「飛鳥寺跡発掘調査報告」(前掲)。
- ④⑲ なお、剝離面のあり方から、回転利用の成形の場合でも、粘土板を重ねていくという手順をふむと考えられる。
- ④⑳ 法隆寺4C型式のように、回転成形ではあっても、行基苜蓿用丸瓦が付く場合もある。退化型式における混乱と理解したい。法隆寺「法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書」(前掲)。
- ④㉑ 若草伽藍造営直前の須恵器と、四天王寺創建瓦生産時の須恵器が、ともに準上りⅡ段階に比定できることによる。一章2節参照。
- ④㉒ 奈良国立文化財研究所「山田寺第一次の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』七、一九七七年)。
- ④㉓ 京都大学文学部考古学研究室蔵資料において確認した。一方、亀田修一の研究によれば、百済の軒丸瓦には、丸瓦の接合部に片ほぞ状の調整を加えるものが相当量あり、回転成形技法の盛行がうかがえる。亀田修一「百済古瓦考」(『百済研究』第二二集、ソウル、一九八一年)。
- なお、この点についての議論は、別稿に譲りたい。

三 初期瓦生産の特質

前章では、製品である瓦を材料に、瓦工の動向を検討してきたが、その瓦工を中心に営まれる生産組織、それを維持する生産体制に考察を及ぼすためには、生産地における様相を検討しなければならない。そして、初期の瓦窯は、発掘例の

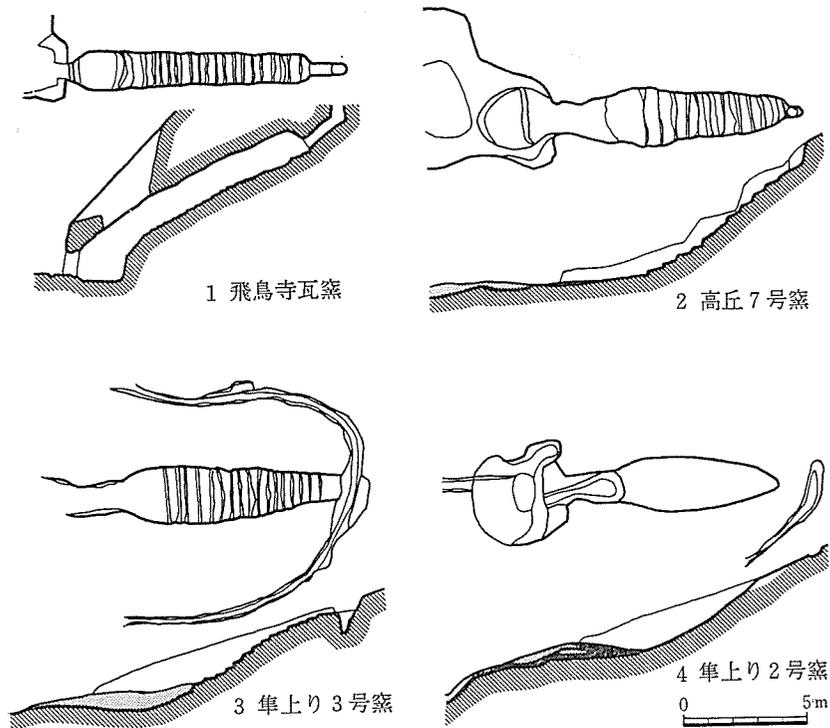


図8 初期の瓦窯の窯体（縮尺300分の1）

増加により、細かな検討に耐えうる量的内容を持つようになってきている。また、先に設定した年代の枠組から、瓦窯の年代をかなり細かく限定することが可能である。このように瓦工の動向に加えて、瓦窯の窯体構造や操業形態、供給関係などを合わせて検討することから、初期の瓦生産の特質に迫ることができると考える。

さて、発掘調査の施された初期の瓦窯として、飛鳥寺瓦窯^①（奈良県高市郡明日香村飛鳥）、幡枝元稻荷窯^②（京都市左京区岩倉幡枝町）、牟上り窯^③（京都府宇治市菟道）、楠葉平野山窯^④（大阪府枚方市北楠葉町・京都府八幡市橋本）、高丘窯^⑤（兵庫県明石市大久保町）が挙げられる。それらのなかで、飛鳥寺瓦窯は、発見が一九五三年と最も古く、飛鳥時代の瓦窯の代表とされてきた。窯の構造は、地山を掘り抜き（地下式）、焼成部の床が階段状をなす（有段）窄窯^{ひながま}である（図八一）。狭口から煙道まで一二mあり、長大な規模を持つことがわかる。出土遺物は、平瓦・丸瓦のみで、軒瓦

や須恵器の出土が確認されておらず、年代の明確な手がかりを欠く。

この飛鳥寺瓦窯の窯体とよく似た構造を持つ窯が、幡枝元稻荷窯、隼上り窯、楠葉平野山窯、高丘窯で検出されている。そのなかで、規模の明らかな幡枝元稻荷窯、隼上り一号窯(図八-3)、同三号窯、高丘七号窯(同2)は、全長がいずれも一―一二mで、同時期の須恵器窯に比べて長大である。須恵器窯と同様に窖窯ではあるものの、構造や規模において飛躍があることがわかる。このことから、有段窖窯が、瓦生産技術の一部として、朝鮮半島から伝えられたと考えてよかる。ゆえに、この構造の窯を瓦窯形態の窯と呼ぶ。

ところで、隼上り窯では少なくとも三基、楠葉平野山窯では六基の窯が検出され、高丘窯では、総数二〇基のうち少なくとも四基が七世紀前半に属しており、窯が群構成をなしている。そのような場合、隼上り二号窯(図4)や楠葉平野山二、三号窯のように、瓦窯形態の窯のほかに須恵器窯の形態をとる窯が同時に存在している。そのなかには、焼成部床面を無段から有段に改造し(隼上り二号窯)、あるいは、床面上に瓦を貼りつけて段を作って(楠葉平野山三号窯)、瓦の生産を行った窯もある。また、瓦窯形態の窯においても、瓦のほかに須恵器を焼成していることも多く、隼上り三号窯のように、有段から無段に床面を改造して、須恵器の生産を行った窯もある。このように、瓦生産の場において瓦生産の技術による窯と、須恵器生産の技術による窯が併存し、基本的には製品も作り分けがなされているが、需要に応じて、瓦窯形態の窯で須恵器が、須恵器窯形態の窯で瓦が生産されている状況を捉えることができる。

先に挙げた初期瓦窯のなかでは、飛鳥寺瓦窯のみが唯一の例外であり、瓦陶兼業が一般的な操業形態でなかったかと考えられる。採集遺物によって確認される初期の瓦窯を含めても、奈良県今池窯^⑦、北倭村窯^⑧、天神山窯^⑨、出土軒丸瓦から七世紀前半に比定できる窯において、須恵器も散布していることが確認され、瓦陶兼業が広くみとめられることがわかる。瓦陶兼業は、七世紀前半に限られず、それ以降もしばしばみられるので、初期瓦生産のみにもみられる生産形態^⑩とは言えないが、初期の窯で大勢を占めることは、注意してよいであろう。

ところで、瓦陶兼業とともに、瓦生産者と須恵器生産者の交錯を示す遺物として、同心円文当て板痕を凹面に留める平瓦が挙げられる。初期寺院・瓦窯では、飛鳥寺^⑫、法隆寺^⑬、広隆寺^⑭、北野麁寺^⑮、幡枝元稻荷窯^⑯などに発見例がある。同心円文当て板が、須恵器、とくに麁の成形において普通に用いられるものであるので、瓦生産の場における須恵器工人の存在を示す遺物として取りあげられてきた^⑰。先に挙げた瓦生産地において須恵器窯形態の窯がみられることを考え合わせると、瓦の生産にあたって、窯場をとにもすることになった須恵器工人が、しばしば瓦の生産にも従事していたということが推測できる。

須恵器工人が瓦生産にとりこまれる背景には、須恵器と瓦の生産量の違いが考えられる。初期の瓦窯、とりわけ瓦窯形態をとる窯では、窯体に補修が施されることが多く、通例、何枚もの操業面を持っている。たとえば、幡枝元稻荷窯では六面、隼上り一号窯では一一面に及ぶ操業面が確認されている。楠葉平野山窯でも、須恵器のみ出土する二号窯を除くと、窯体の補修が著しく、とくに七号窯では、床面をかなりかさ上げして、窯体を造り変えていることが判明している。七世紀以降の須恵器窯が、補修されつつ使いつづけられることが少なくなることと対比すると、瓦を生産した窯の使用頻度が高かったことがわかる。瓦窯が、一ヶ所で数基の窯から構成されることが多いことを考え合わせると、須恵器と比べて短期間に莫大な量の生産を行う必要が、瓦生産にあったことがうかがわれる。

ここで、瓦の供給関係についてみておこう。隼上り窯では、六種類の軒丸瓦が出土しているが、そのうち五種類が豊浦寺・平吉遺跡で出土するが、残る有稜単弁八弁軒丸瓦(図七—3)は、両遺跡からは出土していない。これと同範^⑱の幡枝元稻荷窯Cは北野麁寺に供給されているが、周縁を持たない点で隼上り窯Dと異なり、隼上り窯Dの供給先は明らかではない。同様に、複数の供給先を持つ窯に、楠葉平野山窯がある。大多数を占めて出土するのは四天王寺式の楠葉平野山窯Aであるが、ほかに奥山久米寺式のB、豊浦寺式のCがあり、「山田寺式」の有子葉単弁八弁軒丸瓦(D)も出土している。

A・Dは四天王寺で出土するが、B・Cは出土しておらず、別の供給先を考える必要がある。そのうち、Bは、中房の大

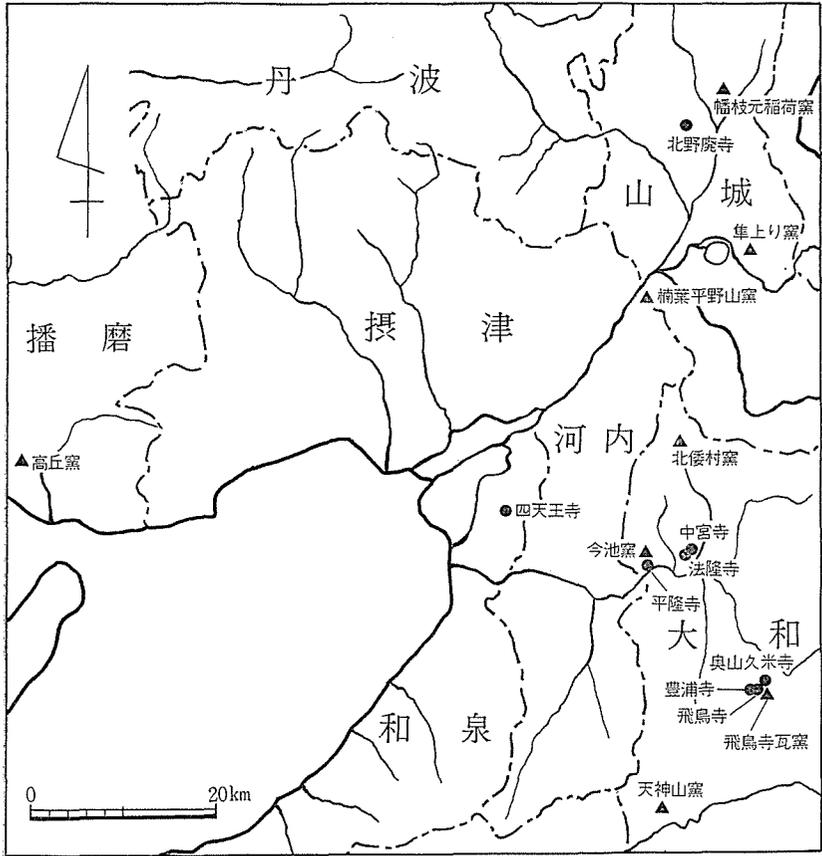


図9 初期の瓦窯と関連寺院

きさや蓮子の配置、花弁の長さや幅といった特徴から、奥山久米寺出土例に酷似し、供給先の候補に挙げることができると考えられる。楠葉平野山窯では、四天王寺所用瓦を生産する間に、奥山久米寺へも瓦を供給していたと考えられる。

ひとつの生産地から複数の寺院に瓦が供給された背景に、生産地と供給先がかなり離れているという状況がある。飛鳥寺近傍の飛鳥寺瓦窯や平隆寺近傍の今池窯といった例も存在するが、幅枝元稻荷窯から北野廃寺、楠葉平野山窯から四天王寺、奥山久米寺、隼上り窯から豊浦寺というような遠距離に及ぶ例もある。そして、播磨の高丘窯から出土する軒丸瓦は、花弁端の特徴などから奥山久米寺出土例に酷似し、両遺跡で出

土する格子叩き目を磨り消す平瓦も、色調、胎土ともよく似ており、^②高丘窯から奥山久米寺への供給が推測できる。供給が極めて遠距離に及ぶ例として重要である。

供給先の寺院が遠隔地に所在する場合、水運の便の良い所に瓦窯が立地していることが多い。隼上り窯は宇治川に近く、宇治郡の大阪である岡屋津^②も近傍に存在する。楠葉平野山窯は淀川に近く、楠葉の地は古くから交通の要衝である。また、高丘窯は、古代瀬戸内海航路の要港である魚住泊の近くに位置している。重量の大きい瓦の輸送には、水運が利用されたと考えられる。これは、遠隔地からの生産、供給を可能にしたひとつの条件として評価できる。

寺院の造営において、所用屋瓦の生産を寺院の近くで行うことが最も効率的であり、事実そういう例も多い。にもかかわらず、瓦の生産をわざわざ遠隔地で行うことに対しては、何らかの理由が存在するはずである。そこで注意しなければならぬのは、遠隔地供給の行われた初期の瓦生産地のすべてが瓦陶兼業窯であり、かつ、七世紀後半も窯業生産が継続している場合が多いことである。一方、六世紀末から七世紀前半は、須恵器の生産地が増加する時期として理解されている。^④瓦の遠隔地供給が、地方窯を確立していく須恵器生産の動向と関連をもつことが予想される。以下、この点について、各例を検討しよう。

播磨の高丘窯は、二〇基に及ぶ窯が分布するが、瓦を生産したのは七世紀第二四半期に限られ、以降、須恵器の生産のみが継続している。^⑤一方、八世紀初頭の三号窯では、鴟尾が焼成されており、かつ、その鴟尾が四天王寺に供給されたと考えられる。須恵器の生産地に転じたのちに、寺院造営に関わる製品を生産していることは、注意してよい。

岩倉地域において、幡枝元稻荷窯とほぼ同時期に須恵器生産が開始している。そして、その生産は、窯場を転々と移しながら、七、八世紀を通して行われている。^⑦また、幡枝元稻荷窯に続く瓦陶兼業窯として、木の墓窯、ケン山窯のほか、栗栖野窯のなかの最古の一群^⑧があり、いずれも七世紀後半に属する。木の墓窯から北白川廃寺への供給が推定できるように、^⑨北野廃寺や北白川廃寺などの京都盆地の寺院に瓦が供給されたと考えられる。このように、岩倉地域では、瓦生産を

交えながら須恵器生産が継続したという窯業生産の展開をうかがうことができる。

楠葉平野山窯については、地理的にやや離れてはいるが、七、八世紀を通して須恵器生産が行われている枚方窯跡群との関係が考えられる。岩倉地域と同様の展開をみとめることができるかもしれない。また、隼上り窯の存在する宇治地域についてみると、七、八世紀に属する瓦陶兼業窯、須恵器窯が二、三ヶ所ずつ知られており、前述の各例と同様の傾向を持つことがわかる。

瓦生産中心の展開がより顕著な例として、五条地域が挙げられる。この地域で最古の瓦陶兼業窯である天神山窯が、飛鳥地域の奥山久米寺へ瓦を供給したことを推測した^⑤。そして、この地域には、川原寺創建の瓦を生産した荒坂窯^⑥や、七世紀後半以降、飛鳥寺や本薬師寺に瓦を供給している牧代窯など、七、八世紀に瓦を生産した窯が分布し、飛鳥地域に瓦を供給する生産地としての性格をもつ窯業地帯であったことがわかる。しかも、七世紀後半の荒坂窯も瓦陶兼業窯であり、瓦生産地の性格を持ちながらも、須恵器生産との交錯が続くことが注意される。

以上の各例でみてきたように、瓦の遠隔地供給の背景に、須恵器の地方窯の展開との関わりがみとめられる。少なくとも、これらの例に関しては、地方窯を確立しつつある須恵器工人に、瓦生産技術を保持する瓦工が結びつくことによって、瓦の生産が維持された状況を考えることができる。ところで、初期の瓦陶兼業窯出土の須恵器のなかで主体を占めるのは蓋杯であり、同時期の須恵器窯と異ならない。また、瓦陶兼業窯から陶棺や土錘などが出土することもあり、須恵器の供給先が瓦のそれとは相違することがわかる。これらの点も、瓦生産に対する須恵器工人の関与のあり方を知るうえで示唆的である。瓦生産に対する須恵器工人の関与は、飛鳥寺の発掘以来、推測されてきているが、その具体的な様相については、あまり明らかでなかった。本稿では、瓦窯の窯体や操業形態に加えて、瓦の遠隔地供給とそれをめぐる須恵器生産の展開を視野に入れることから、その関わり方の一端を明らかにすることができたと考える。瓦陶兼業が七世紀後半にもみとめられることや、岩倉地域や五条地域など、七世紀前半の状況がひきつづいていることを考え合わせると、このような

生産の特質は、飛鳥時代を通して維持されていることがうかがえる。

- ① 網干善教「高市郡飛鳥村飛鳥瓦窯跡」(奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報)第五輯、一九五五年、奈良国立文化財研究所『飛鳥寺瓦窯調査報告』(前掲)。
- ② 横山浩一・吉本堯俊「京都市幡枝の瓦陶兼窯跡」(前掲)。
- ③ 宇治市教育委員会「準上り瓦窯跡発掘調査概報」(前掲)。
- ④ 西田敏秀「楠葉東遺跡内第五瓦窯」(前掲)、瀬川芳則「河内楠葉の飛鳥瓦窯群をもつ遺跡」(『日本歴史』第三八八号、一九八〇年)、八幡市教育委員会「平野山瓦窯跡発掘調査概報」(前掲)。
- ⑤ 兵庫県教育委員会「明石高丘地区埋蔵文化財調査略報」(前掲)。
- ⑥ 百済の扶余に同様の瓦窯が知られている。奈良国立文化財研究所『飛鳥寺瓦窯調査報告』(前掲)。
- ⑦ 奈良県生駒郡三郷町勢野に所在。田中重久によって瓦窯跡であることが推定されたが、土器も散布することから、「瓦窯であると同時に土器の窯でもあったらしい」と指摘されている。田中重久「平隆寺創立の研究」(『考古学』第九巻第一二号、一九三八年)。
- ⑧ 奈良県生駒市山田に所在。田中重久「平隆寺創立の研究」(前掲)において紹介され、法隆寺Aと同じ文様の軒丸瓦とともに、須恵器も散布することが記されている。
- ⑨ 奈良県五条市今井に所在する。斜面に沿って、瓦・須恵器が散布することが知られている。近江昌司「五条市天神山瓦窯の遺跡と遺物」(前掲)。
- ⑩ このほか、奥山久米寺式の蓮華文瓦板と船橋庵寺式の軒丸瓦の出土した末の奥窯も、瓦陶兼窯であることが推測されている。井内功「角端点球形式花弁の蓮華文つき棟端飾板について」(前掲)。
- ⑪ 瓦窯形態の窯と須恵器窯形態の窯が併存する瓦陶兼窯の例として、
 - ⑫ 八世紀初頭の京都府周山窯跡を挙げることができる。京都大学文学部考古学研究室『丹波周山窯址』(一九八二年)。
 - ⑬ 奈良国立文化財研究所「飛鳥寺瓦窯調査報告」(前掲)、および佐原真「平瓦桶巻作り」(『考古学雑誌』第五八巻第二号、一九七二年)第二六図。
 - ⑭ 法隆寺「法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書」(前掲) 図四九。
 - ⑮ 森下衛氏の御教示による。
 - ⑯ 京都市埋蔵文化財研究所「北野庵寺瓦窯調査概報」昭和五十七年度(一九八三年) 図版八。
 - ⑰ 佐原真「平瓦桶巻作り」(前掲)。
 - ⑱ 坪井清足「飛鳥寺創立」(『古代の日本』第五巻 近畿、一九七〇年)。
 - ⑲ 田辺昭三「陶邑古窯址群」I (前掲)。
 - ⑳ この同範囲は、現物照合の結果、推測されたが、範傷の一致という確証は得られていない。
 - ㉑ 奥山久米寺で出土する、もう一種類の奥山久米寺式軒丸瓦は、中房の大きさや蓮子配置をはじめとする特徴から、天神山窯例(図七・四)に酷似する。この瓦については、天神山窯からの供給が推測される。
 - ㉒ 大村敬通氏および大脇潔氏の御厚意で、実見することができた。
 - ㉓ 千田稔・足利健亮・吉村亨・武藤直「津と荘園」(『宇治市史』一 古代の歴史と景観、一九七三年)。
 - ㉔ 『万葉集』に「名寸隅の船瀬」とある。位置については、明石市大久保町江井ヶ島に比定する意見が有力である。千田稔「埋もれた港」(一九七四年)。
 - ㉕ 田辺昭三「陶邑古窯址群」I (前掲) 以来、定説化している。
 - ㉖ 高丘一〇号窯、一一号窯など。

- ②⑥ 明石市教育委員会「明石市大久保町高丘第三窯跡発掘調査報告」(一九六六年)。
- ②⑦ 京都大学考古学研究会「岩倉踏査報告Ⅴ」『トレンヂ』三五、一九八三年。
- ②⑧ 京都大学考古学研究会「岩倉踏査報告Ⅴ」『トレンヂ』三四、一九八二年。
- ②⑨ 京都市埋蔵文化財調査センター『ケン山窯跡発掘調査概要報告』(一九八五年)。
- ③① 軒瓦のほか、同一の叩き板による平瓦の存在から、供給関係が推測されている。京都大学考古学研究会「岩倉踏査報告Ⅴ」(前掲)。
- ③② 北野耕平「古墳時代の枚方」『枚方市史』第一卷、一九六七年)。
- ③③ 山田良三「寺院の造立」『宇治市史』一、(前掲)。
- ③④ 前掲注②参照。
- ③⑤ 岸熊吉「大和に於ける古代窯跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第一輯、一九五九年)。
- ③⑥ 関川尚功「五条市牧代瓦窯群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』一九七八年度、一九七九年)。

結 語

本稿では、須恵器の編年を基準に年代の枠組を提示したのち、瓦生産の定着期の特徴を、瓦に反映される瓦工の動向と、生産地にみられる様相から考察した。

瓦窯に対する検討からは、初期の瓦生産が、地方窯を確立しつつある須恵器生産と結びつくことによって維持されている状況が示唆されることを述べた。この点については、現状では、まだまだ実例に乏しく、包括的な言及が困難であるが、瓦陶兼業の内容が、須恵器工人の動員によって恒常的な瓦工房が形成されたことを示すのではなく、不安定で突出した性格を持つ瓦の需要に応えるために、労働力を臨時に須恵器工人に依存したという状況を示しているとみておきたい。軒瓦の系統にみられるように、特定の技術が保持され、丸瓦・平瓦を含む瓦生産の流派が形成されているので、少なくとも、瓦作りの主要な部分を瓦工が担っていたことが推測できる。須恵器工人が瓦生産に従事した場合、補助的な労働に留まっていたのではないだろうか。また、同一の系統の軒丸瓦が複数の瓦窯で生産されていることや、瓦窯におけるひとつの系統の瓦の生産期間が長くないことから、技術を保持する瓦工が、頻繁に移動していたことがうかがえる。一方、高丘窯や

岩倉窯跡群などでは、瓦生産に併行して、また、終了してから、須恵器のみの生産が行なわれている。瓦生産に従事する須恵器工人は、瓦工とともに移動したのではなく、一時的に瓦生産に関与したのち、須恵器のみの生産に復帰したのである。

飛鳥時代には、瓦生産が飛躍的に拡大していくが、その要因としては、当然、寺院造営の普及による需要の高まりを挙げねばならない。しかし、その需要を充たすことを可能にした条件が、瓦生産の体制や技術に備わっていたことも重要な事実である。本稿で述べた、技術を保持し移動を常とするという瓦工の動向や、須恵器生産に労働力を依存する生産の特質が、瓦生産の拡大を可能にした条件の一部をなしていると考えられる。そして、この特質は、七世紀中葉以降に爆発的に増加する地方寺院の造営にあたって、各地方への瓦生産の拡散を容易にした要因のひとつであると考えられる。

瓦生産と須恵器生産の関係でみたように、全く新たな技術が導入される際に、その技術によく似た技術を持つ在来の生産から工人が動員されることが、しばしばみとめられる。たとえば、仏教に関連する分野では、光背などの仏教に必要な製品の製作に、馬具作りの工人が従事したことが推測されている。^①このような現象は、新たな技術の定着、継承をはかるうえで、重要な役割を担ったと考えられるが、また、動員された側の生産にとっても、大きな変化を及ぼしたことが予測される。瓦生産に交錯する時期、須恵器生産にとっても一大画期であったことが指摘されてきているが、その変化は、単に器形の変化や窯の分布の拡大といった面だけに留まらず、工人の把握のされ方をも変える内容を持っている可能性もある。このような須恵器生産の変化を含む窯業生産全体の転換を明らかにしていくうえで、本稿で検討した瓦生産の定着期の特質が解明の糸口となると確信する。

① 小野山節「花形香葉と光背」『MUSEUM』第三八三号、一九八三年。

挿 図 出 拠

図一 1～11、13 宇治市教育委員会『隼上り瓦窯跡発掘調査

概報』（一九八三年）。〈隼上り窯〉と略記。

図二 1、2 法隆寺『法隆寺昭和資財帳調査秘宝展図録』一、一九八三年。

3～6 法隆寺『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』

(一九八五年)。〈法隆寺〉と略記。

- 7、8 瀬川芳則「四天王寺瓦窯址と出土の須恵器」(考古学と古代史)同志社大学考古学シリーズ1、一九八二年)。

- 9、12 八幡市教育委員会「平野山瓦窯跡発掘調査概報」(一九八五年)。

- 13、17 奈良国立文化財研究所「川原寺発掘調査報告」(一九六〇年)。

- 18、23 中尾芳治「前期難波宮をめぐる諸問題」(考古学雑誌)第五八巻第一号、一九七二年)。

- 図五
1、2 奈良国立文化財研究所「飛鳥寺発掘調査報告」(一九五八年)。〈飛鳥寺〉と略記。

3 〈法隆寺〉

- 4 大阪府教育委員会「河内新堂・鳥含寺の調査」(一九六一年)。

図六
1 〈法隆寺〉

- 2、4 瀬川芳則「大阪府枚方市葛上麁寺新発見古瓦資料によせて」(藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢)一九八三年)。

図七
1 〈飛鳥寺〉

2、3 〈隼上り窯〉

- 4 奈良県立橿原公苑考古博物館「大和考古資料目録」第一集(一九七一年)。

図八
1 〈飛鳥寺〉

- 2 兵庫県教育委員会「明石高丘地区埋蔵文化財調査略報」(一九六八年)。

3、4 〈隼上り窯〉。

なお、これらの資料のうち、図一—6、7、12、図二—7、8と、瓦の資料全部は、筆者の作成した図面、写真による。

〔謝辞〕 本稿の作成にあたっては、小野山節先生から御指導をいただいた。資料の調査において、宇治田和生、近江昌司、大村敬通、大脇潔、岡内三眞、奥村清一郎、杉本宏、高橋美久二、土橋理子、都出比呂志、中尾芳治、西崎卓哉、西田敏秀、萩本勝、深澤芳樹、森下衛、毛利光俊彦、八木久栄、山本忠尚の各氏に大変お世話になった。また、土器・瓦の見方について、上原真人、宇野隆夫、五十川伸矢、深澤芳樹、藤村淳子の各氏をはじめとする諸先輩に御教示をいただき、文章表現については、岡村秀典氏の御助言を得た。そして、京都大学文学部考古学研究室、京都大学埋蔵文化財研究センターの諸学兄には、さまざまな御援助をいただいている。末筆ながら、記して感謝の意を表する次第である。

(京都大学文学部助手)

The Early Roofing-Tile Production and the Real Conditions of the Craftsmen in the Five Home Provinces 畿内

by

Tetsuro Hishida

In this paper we consider the first stage of roofing-tile production as ranging from its very beginning to the period of the building of local temples. Our aim is to clarify the features of this stage by analyzing the real conditions of the craftsmen and of the producing centers.

First, we correct the chronological framework of Sue-Pottery 須恵器, founded on the materials excavated from relics of furnaces for tiles and ceramics. Then, we assess the chronology of tile production, examine the technical knowledge, and try to trace the descent of the tilers. As a result, it is made clear that until the first quarter of the 7th century there existed three schools, which diverged to be more various in the second quarter.

Also, we minutely investigate the production system (the forms of furnaces, the operation and the supply). From this investigation we can suppose that the production system of roofing-tiles was formed by the combination of the tilers with technical knowledge and the craftsmen of Sue-Pottery, and that the existence of this combination depended upon the demand. We think of the said production system as one of the most important conditions that facilitated the expansion of tile production in the 7th century.

The *Shiren* 士人 Class in the Song Dynasty

by

Yoshiro Takahashi

In the Song dynasty, to add to the diffusion of government or private schools, the arrangement of the imperial examination (*keju* 科举) system,